

現代のフロンティアスピリット

斗南丘酪農農業協同組合長 原 英輔

青森県下北半島むつ市は今冬30年ぶりの大雪に見舞われ、例年圃場作業の始まる4月に入った現在も畠は50cm近い積雪におおわれています。市内の東端に、今年開拓70周年を迎える酪農専門農協「斗南丘酪農」があります。約400haの開拓地中央を走る幹線道路沿いの両側に10戸ずつ整然と配置されています。

斗南丘酪農は、20戸のほぼ全員が北海道で酪農経営を営んでいる酪農家でした。戦時中の混沌とした時代とはいえ、一定の安定した経営から新たな未開の土地への入植は、多くの不安、多くの困難が予想されました。開拓当初、連れてきた乳牛の3分の2が死亡するというような不運に見舞われています。それでもなお、開拓への意欲を燃え上がらせたのは、内地での理想の酪農経営と理想郷作りを目指すフロンティアスピリットだったと思います。

開拓を進める上で、組合は個々の経営を基本にしながらも協同の精神を重視し、20戸の団結を徹底した話し合いを深めました。毎夜遅くまで話し合い、翌日はまた早朝から作業という毎日だったということです。組合員の牛舎の火災消失などの際は共同で再建し、約100haの防風林は共同出役で管理していました。協同の精神の中でも最も特徴的なものは、昭和35年に発足したトラクター利用部です。現在では一般的にコントラクターと呼ばれる作業受託組織をすでに50年前に導入し、稼働させました。トラクターや一連の作業機械を導入するとともに、専任のオペレーターを農協職員として雇用して農家の圃場作業全般を受託し、繁忙期の過重労働と機械購入負担の

軽減を図ってきました。

その効果もあり斗南丘酪農では開拓から40数年1戸の離農者もありませんでした。また、全国草地コンクールや日本農業賞での受賞など、県内では有数の酪農地帯として多くの視察や研修生を受け入れてきました。しかし、主に後継者問題で一人また一人と離農者が続き、30年を経た現在、戸数は8戸に減り、経営者は30代40代の2名をのぞくと平均年齢60歳、現時点で就農している後継者はいない状況です。酪農経営の改善や発展が常に求められる状況の中での事業継承の難しさを感じさせられますが、別な見方をすると、開拓の精神が“個人主義”や“休暇・レジャー重視”などの社会的風潮に抗しきれなかったとも言えるかもしれません。

現代は、新しい形のフロンティアスピリットが必要な時代に入ったのではないでしょうか。北海道から内地へと常識とは逆の開拓に挑戦したように、現代の複雑な状況への新たな視点からの挑戦が必要な時なのでしょう。平成10年に開店した「ミルク工房ボン・サブ」は、斗南丘地区内の酪農家が自らの生乳を乳製品に加工販売するため創業した施設です。新規就農者が経営者になる可能性を拓く法人化を目指す組合員。視点を下北半島全体に広げてのコントラクター、ローコストTMRセンター、遊休農地の活用、異業種との連携など、視野を広げ、発想を変えて斗南丘型、下北型の酪農農業の展開にチャレンジすることが現代のフロンティアスピリットなのかもしれません。

(はら えいすけ)